

# 動態語用論における対話結合子の分析

久 保 進

## 1. はじめに

対話は対話参加者の何れか一方が終了を宣言しない限り、論理的あるいは形式的には再帰的に永遠に続く可能性がある<sup>1)</sup>。物理学における作用とそれに対する反作用の関係は両者の力が均衡することを言うが、発話の場面における一つの心的行為とそれに対する心的対抗行為は、受容と生成の螺旋鎖をなすと想定される。対話を構成する第1の参加者の発話は第2の対話参加者にとっては、受容の対象であると同時に、自らの発話生成の手がかりとなるものである。さらには、対話の口火を切る第1の発話者も、対話相手についての予備知識や発話直前あるいは最中の言外の脈絡情報を解釈することで、発話生成の手がかりとしている。語用論はこのような、対話の動的特性を説明しなければならない。

従来の発話行為理論は主として話し手の立場から理論であり、また、関連性理論は聞き手の立場からの理論である<sup>2)</sup>。従って、理論的語用論を代表するいずれの理論も、対話に内在する螺旋鎖ダイナミズムを十分に説明できるとは考えにくい。本稿では、対話表示を用いることにより動的な対話の展開を静的な再帰構造に部分写象するという試みを提示する<sup>3)</sup>。この仕組みの特徴は、従来の発話行為理論とは異なり、発語内行為を命題  $P$  とその命題に作用する発語内効力  $F$  からなる単位とは定義せず、先行発話者の発語内行為  $F_a^A$  とその発語内行為に作用する発語内効力  $F_a^B$  とからなる対話の単位と定義している点にある<sup>4)</sup>。換言すれば、発語内行為の一般形式は  $F(P)$  ではなく、 $F_a^B(F_a^A(P))$  の形式をとると定義しているのである<sup>5)</sup>。ただし、先行発話者の発語内効力と応答者の発語内効力が共に同じ言明の発語内目的を持つ場合には、発語内効力の吸収規則が働き、

先行発話者の発語内効力は応対者のそれに吸収されると仮定する<sup>9)</sup>。そのような場合、一般形式は、従来の発話行為理論のそれとおおむね合致する。従って、このような想定が成り立つとすると  $F(P)$  は  $F_n^B(F_m^A(P))$  の特殊な場合であるとみなすことができ、ここに紹介する理論的枠組み、動態語用論は発話行為理論を包摂する一般理論ということになる。

Rouchota (1998: 12) 等でも論じられているように、対話結合子は、2つ以上の命題を結ぶのみならず、発話と発話行為、発話と非言語的文脈をも結ぶ。従って、そのような対話結合子を説明しようとする対話理論は、対話中の単独の発話の解釈を与えるだけでは不十分で、先行の発話との関係を明示的に取り扱える枠組みでなければならない。その意味で、対話結合子の分析をすすめることは、発話行為理論の動的語用論への理論的改編の利点を明示するうえで有効であると考えられる。

また、Traugotte and Heine (1991) や Hopper and Traugotte (1993) の指摘にもあるように、自然言語の個々の言語断片は歴史的に実質語から機能語への変遷をたどる。しかも、その言語断片は、同時期において、異なった変遷段階の意味あるいは文法特徴を持つ複数の異なる用法で用いられることが多い。本稿で取り上げる「だって」や「だから」は、特に、テキスト連結機能的内容を持つ語から、話者態度表出的内容を持つ語への変遷を辿る言語断片である。対話理論は、対話に用いられる言語断片の真の意味・機能を知る上で、それが言語変遷のどの段階のものであるか、そして、それが他の段階の用法と、変遷の尺度の上で相互にどのような位置づけにあるのかも確認しておかねばならない。換言すれば、動態語用論は対話の観察に際しては、文法化の視点を導入することになる。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、文法化の視点を取り入れていない対話分析の持つ問題点を指摘する。第3節では、動態語用論の枠組みで「だって」と「だから」の2つの対話結合子を分析する。そして、第4節は当座のまとめと今後の展望に当てる。

## 2. 先行研究の問題点

文法化の視点を対話分析に取り入れていない対話結合子の分析の持つ問題点を指摘するために、ここでは、代表的な対話結合子として「だって」を取り上げる。「だって」についてのすぐれた先行研究には、Maynard (1993), 蓮沼 (1997), 沖 (1996) がある。しかし、いずれの研究もいくつかの問題点を包含している<sup>7)</sup>

Maynard (1993) と蓮沼 (1997) では、「だって」が「反対」と「理由付け」の意味を持つとされている。特に、両者は、「でも」に置き換えが可能な(1)に類するの例を用いて、「だって」は「反対」と「理由付け」の両方の読みの融合あるいは折衷的意味を持つ場合があるとまで論じている。しかし、なぜそのような事態になっているのかの説明がない<sup>8)</sup>。本節では、「反対」の読みが「だって」の本義ではないことに絞って議論し、それとの関連でこの疑問についての解答を用意する。

- (1) 向田<sub>1</sub>： 人工衛星が飛びはじめたときに、やっぱりあの理屈がどうしてもわからないんですよ。
- 吉行<sub>1</sub>： だって/でも，ラジオわかる。
- 向田<sub>2</sub>： 全然わかりません，私.....。
- 吉行<sub>2</sub>： ラジオのわからない人に人工衛星は無理ですよ。

(蓮沼(1995: 276)よりの引用；下線部は久保)

さて、もし、「だって」の本義が「反対」の読みであるなら、「反対」の読みを本義とする「でも」と対話配列的上の互換性があるはずである。久保(1998)に沿って、「激励 (encouragement)」、「思いとどませ (discouragement)」、そして発話者の「非関与 (non-commitment)」という3つの相互に排他的で異なる対話状況において、これら2つの対話結合子が、それぞれ、どのような対話

配列をなすか観察しよう。

まず、(2)の対話は「激励」の発話がB<sub>1</sub>の発話に出現する場合である。

- (2) A<sub>1</sub>: 少し休暇をとろうかな。  
 B<sub>1</sub>: とりなさいよ! だって/\*でも ずっととってないんでしょ?  
 A<sub>2</sub>: うん。  
 B<sub>2</sub>: それならとったら。

(Maynard, 1993: 105; 下線部は久保による)

この場合、「だって」は「激励」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行されるが、「でも」は先行されない。

次に、(3)の対話は「思いとどませ」の発話がB<sub>1</sub>の発話に出現する場合である。

- (3)<sup>9)</sup> A<sub>1</sub>: 少し休暇をとろうかな。  
 B<sub>1</sub>: よしなさいよ! だって/\*でも ずっととってないんでしょ?  
 A<sub>2</sub>: うん。  
 B<sub>2</sub>: それならよしたら。

(Maynard, 1993: 105; 下線部は久保による)

この場合も、「だって」は「思いとどませ」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行されるが、「でも」は先行されない。

最後に、(4)の対話は発話者が「非関与」な発話がB<sub>1</sub>の発話に出現する場合である。

- (4) A<sub>1</sub>: 少し休暇をとろうかな。  
 B<sub>1</sub>: すきにしたら! だって/\*でも あなた自身のことでしょ?

この場合も、「だって」は「非関与」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行されるが、「でも」は先行されない。

以上の観察から、(2)~(4)で示すように条件を明確にした対話文脈においては「だって」と「でも」の間には互換性がなく、互いに相補分布をなしていることが判る。従って、Maynard (1993) や蓮沼(1997)のように、「だって」の本義を部分的にでも「反対」に求めるのは適切ではない<sup>10)</sup>

沖(1996)はMaynard (1993) や蓮沼(1997)と違って、「だって」の本義を「理由付け」に求め、(1)の「反対」の読みは、例えば、(2)の「だって」に先行する発話が省略された結果であると想定し、派生的なものにとらえている<sup>11)</sup> この沖(1996)の観察ならびに記述は基本的には適切であると思われる。しかし、沖(1996)には、(i)何故、先行発話が省略されると「反対」の読みが生じるのか、そして、逆に、(ii)何故、「だって」で始まる発話が、「反対」の読みを表す先行発話を持つと想定できるのか。換言すれば、何故、そのように復元可能なかという2点についての説明がない。このような問題点は、以下で見るように、対話分析に文法化の視点が加わって初めて解決されると思われる。

次の(5)と(5')の対話を比較されたい。(5)の対話は、先行する発話が言葉で表現されている場合で、「だって」は「反対」の読みを持たない。

(5) H : どうだった。

O : ああ……一笑にふされたよ。

H<sub>2</sub> : 私は信じるわよ。だってトモちゃん、確かに見たって言ったもん。  
(岡崎, 1994)

一方、(5')は先行する発話が言葉で表現されていない場合で、先行する発話が言葉で表現されていないという、まさにその事実によって、「だって」は「反対」の読みを持つ。

(5') H<sub>1</sub> : どうだった。

O<sub>1</sub> : ああ……一笑にふされたよ。

H<sub>2</sub> : だってトモちゃん、確かに見たって言ってたじゃない。

(岡崎, 1994; 下線部は久保)

Kubo (1999) では, このような観察に基づき, (6)のような仮説をたてた。

- (6) 仮説: 対話連鎖上必要な先行発話が存在しない場合, 発話の先頭の「だって」は, その先行発話を持つはずの「反対」の読みを継承する。

このような仮説は, 前出の3つの先行研究が説明をし残した3点に, (7)のような回答を与えることができるように想定される。

- (7) (i) 「だって」が発話の先頭の位置で用いられた場合, 対話の文脈において「反対」の読みを持つようになるのは, 先行発話の「反対」の読みを「だって」が継承しているからである。
- (ii) そして, 継承しているからこそ, 逆に, 先行発話が復元可能なのである<sup>12)</sup> さらに,
- (iii) (1)における「だって」が融合とか折衷的と解釈されたのは, 「だって」に対して, その本義に加えて先行発話の「反対」意味が付け加わったからである。

### 3. 動態語用論における対話結合子の分析

以下, 3.1, 3.2 では, それぞれ動態語用論の枠組みで, 対話結合子「だって」と「だから」を文法化の各段階ごとに分析し, それらの段階間の関連を対話表示の違いにより説明する。そして, 3.3 では, そのような分析の結果, 前節で示

した仮説とそれに基づく解答が適切であることを論証し、対話結合子分析のためのより一般的仮説を提案する。

### 3.1 「だって」の分析

さて、「だって」は、対話配列上、(i)その直前と直後に、先行の発話と後続の発話を取る場合、(ii)先行の発話を取らず後続の発話のみを取る場合、さらに、(iii)いずれの発話も取らない場合の3つでしかも3つの限られた場合に用いられる。そして、の配列上の3つのタイプは、結合子の接続詞から感嘆詞への文法化のプロセスに対応する。すなわち、接続詞という範疇に固有の意味と機能を保持している段階、その固有の機能を失い新たな意味を持つ段階、そして、まったく元の機能とは異なる感嘆詞としての機能を担う段階の3つの段階であり、ここでは、それぞれをステージ1、ステージ2、ステージ3と呼ぶ。

#### 3.1.1 ステージ1

ステージ1の「だって」は、その本義である「補足説明」の読みを保証する「だって...もん (=だから)」の型で、2つの連続する発話を連結する接続詞として用いられている。この場合の「だって」は「でも」には置き換えることができないので「反対」の読みは持たない。(8)を参照されたい。

(8) H<sub>1</sub>: どうだった。

O<sub>1</sub>: ああ……一笑にふされたよ。

H<sub>2</sub>: 私は信じるわよ。だって/\*でもトモちゃん、確かに見たって言うてたもん。  
(岡崎, 1994; 下線部は久保)

この場合、「私は信じるわよ。」という、先行発話者の発話に反対を表明する発話行為が明示的に「だって」の直前で遂行されている。ここでは、先行発話者の「ああ……一笑にふされたよ。」という発話は、同義であるか、少なくとも

(9a)に示すように「Oの言明を誰も信じない」を限定含意する。従って、この発話は、「Oの言明を誰も信じない」ことを言明している発話と解釈でき、発話者OをA、Oの言明の命題内容をPで表すと、(9b)のように表すことができる。

- (9) a. 「Oを一笑にふす」 $\models$ 「Oの言明を誰も信じない」  
 b.  $F_{\text{assert}}^A (\sim \exists x [\text{信じる}(x, P)])$ .

それに対して、「私は信じるわよ」という発話は、(10)に示すように、「Oの言明を信じる人がいる」という発話を限定含意する。

- (10) 信じる(私, P)  $\models \exists x [\text{信じる}(x, P)]$ .

従って、この発話は(11)に示すような、「誰も信じてくれない」というあなたの言明はまちがっている、という先行発話と対照をなす言明を行っていることになる。従って、ここでの動的対話連鎖は、発話者HをBで表すと、「反対する」というH<sub>2</sub>の発話内効力  $F_{\text{object}}^B$  がその項に先行発話をとるという形で表示できるから、(11)の対話表示に部分写像することができる。

- (11)  $F_{\text{object}}^B (F_{\text{assert}}^A (\sim \exists x [\text{信じる}(x, P)]))$ .

また、「だってトモちゃん、確かに見たって言ってたもん。」の発話は、「トモちゃん」というのは発話者Oであるから、「トモちゃん、確かに見たって言ってた」の部分の内容は、Oが誰にも信じてもらえなかったと主張している内容である。従って、この部分は、Oの主張内容をPで表すと、(12a)のように表される。また、この発話は、HがOの主張を信じると主張する理由説明になっている。しかも、この発話では「トモちゃんが確かに見た」という主張が成り立つ場合はいつでも「私が信じる」という主張、つまり「誰か信じる人が居る」と



いう主張が成り立つという限定含意の関係が成立する。従って、この発話は、 $F_{\text{explain}}^B$  を「補足説明」を意味する発語内効力とすると、(12b)のように表示することができる。

- (12) a.  $F_{\text{assert}}^A(P)$   
 b.  $F_{\text{explain}}^B(F_{\text{assert}}^A(P) \models F_{\text{assert}}^B(\exists x [\text{信じる}(x, P)]))$ .

従って、 $O_1$ の発話を受ける $H_2$ の対話表示は、左辺に動的対話連鎖の展開を部分写像する論理式を、そして、右辺に補足説明の論理式とる連言として(13)のように表示できる<sup>13)</sup>

- (13)  $F_{\text{object}}^B(F_{\text{assert}}^A(\sim \exists x [\text{信じる}(x, P)])) \wedge$   
 $F_{\text{explain}}^B(F_{\text{assert}}^A(P) \models F_{\text{assert}}^B(\exists x [\text{信じる}(x, P)]))$ .

### 3.1.2 ステージ2

ステージ2の「だって」は、その本義の「補足説明」の読みを保証する「だって...もん (=だから)」の型では用いられない。この場合、「だって」は「でも」との交換が可能で「反対」の読みを持つことができる。さらに、この「だって」は、ステージ1の「だって」と違って、2つの連続する発話を連結する接続詞としての機能を失っている。しかし、そのことは必ずしも発語内行為を連結する結合子としての機能まで「だって」が失ったことを意味しない。(14)を参照されたい。

- (14)  $H_1$ : どうだった。  
 $O_1$ : ああ……一笑にふされたよ。  
 $H_2$ : だって/でも トモちゃん、確かに見たって言ってたじゃない。

(岡崎, 1994; 下線部は久保)

この場合はステージ1と違って、 $H_2$ には、先行発話者の発話に対する賛否等の心的対抗行為を表す、「だって」に先行する発話は明示的な形で存在しない。従って、円滑な対話連鎖を保証するためには、本来在るべき先行発話を持つと想定される発語内効力を、「だって」で始まる発話が肩代わりしなければならない。この場合、「私は信じるわよ」に類する発話の持つ「反対」の発語内効力が、「だって」に引き継がれたと想定される。それは、どのようなプロセスで可能になっているのであろうか。ここでは、ステージ1との比較でその仕組みを考察する。

まず、ステージ1の場合、その発話連鎖は、(15)のように表示された。

$$(15) \quad F_{\text{object}}^B (F_{\text{assert}}^A (\sim \exists x [\text{信じる}(x, P)])) \wedge \\ F_{\text{explain}}^B (F_{\text{assert}}^A (P) \models F_{\text{assert}}^B (\exists x [\text{信じる}(x, P)])) .$$

それに対して、ステージ2では、まず、「だって」の先行発話の命題は空であるから、その発話が明示的であった場合に在ると想定され、かつ、対話連鎖の保存の原則から見て必要と仮定される「反対」の発語内効力のみが存在する。従って、連言の左辺は(16a)のように表される。そして、先行発話が存在しないというまさに、その事実のために、「補足説明の」発語内効力は、その項となる限定含意関係が空の帰結節をとることになり、(16b)のように表される。

$$(16) \quad \text{a. } F_{\text{object}}^B (\phi) . \\ \text{b. } F_{\text{explain}}^B (F_{\text{assert}}^A (P) \models \phi) .$$

従って、先行発話を持たない「だって」を含む動的対話は、(17)の対話表示に部分写像される。

$$(17) \quad F_{\text{explain}}^B (\phi) \wedge F_{\text{explain}}^B (F_{\text{assert}}^A (P) \models \phi)$$

また、この場合、「補足説明の」発語内効力が、その項となる限定含意関係に空の帰結節をとるということは、「説明」という発語内効力を成功条件を満足しない欠陥のある発話行為にしてしまっている<sup>14)</sup>そして、まさにそのような変化が、ステージ2の「だって」が、本義の「補足説明」の読みを弱め、「反対」の読みを持つに至ったことを説明している。

### 3.1.3 ステージ3

最後に、ステージ3を検討してみよう。この段階の「だって」は、接続詞ではなく感嘆詞として機能している場合である。(18)を参照されたい。

(18) Manager<sub>1</sub>: “Deliver this, please!”

OL<sub>1</sub>: “B-But!” (えーっ!)

Manager<sub>2</sub>: “No buts.” (えーっじゃない!)

OL<sub>2</sub>: “W-Well!” (だってェ!)

Manager<sub>3</sub>: “No wells!” (だってェじゃない!)

OL<sub>3</sub>: “A-All rights!” (Akizuki, R, 1990: 85, 太字は久保による。)

この場合もステージ2と同様、「だって」に先行する発話が明示的な形では存在しない。従って、円滑な対話連鎖を保証するためには、本来在るべき先行発話を持つと想定される発語内効力を、「だって」で始まる発話が肩代わりしなければならない。この場合、「困ります」に類する発話の持つ「拒否」の発語内効力が、「だって」に引き継がれたと想定される。そのプロセスは、ステージ2の場合と同様に以下のようなになる。先行発話者の要求内容とそれに対する拒否の発語内効力を、それぞれ、 $P$ と $F_{\text{reject}}^{\text{B}}$ で表すと、「だって」に先行する発話は、(19a)のように表示される。また、「だって」に後続する部分を、仮に「花粉症なので」とし、 $Q$ で表すと、「だって」で始まる発話は、「花粉症であることが成り立つ場合は、マネージャーの要求は受け入れられないということも成り立

つ」という限定含意の関係を項にとる(19b)の式で表される。

- (19) a.  $F_{\text{reject}}^{\text{B}}(P)$   
 b.  $F_{\text{explain}}^{\text{B}}(Q \models P)$

従って、「だって」の前後の発話を補った、Manager<sub>2</sub>とOL<sub>2</sub>の対話の表示は(20a)のようになる。そして、それに対して、前後の発話を持たない対話は(20b)の対話表示に部分写像することができる。さらに、(20b)の連続する2つの発語内効力は共に空の命題を取るから、(20b)は(20c)のように異なった2つの発語内効力の積に書き換えられる。

- (20) a.  $F_{\text{reject}}^{\text{B}}(P) \wedge F_{\text{explain}}^{\text{B}}(Q \models P)$   
 b.  $F_{\text{reject}}^{\text{B}}(\phi) \wedge F_{\text{explain}}^{\text{B}}(\phi)$   
 c.  $F_{\text{reject}}^{\text{B}} \wedge F_{\text{assert}}^{\text{B}}$

従って、(20a)と(20b)、(20c)を比較すると、後者は前者と違って、「だって」の先行発話が明示的であった場合に、在ると想定され、かつ、対話連鎖の保存の原則から見て必要と仮定される「拒否」の発語内効力と、「補足説明」の発語内効力の項が空であるために、その成功条件が満足されず、「言明」の発語内効力しか持たない<sup>15)</sup>しかし、これら2つの連続する発語内効力の連鎖が、「抗議」あるいは「強い不平」の読みを生み出すに至っている。

### 3.2 「だから」の分析

#### 3.2.0 はじめに

まず、(21)を参照されたい。

- (21) 敬一郎： ニューヨーク行きが本決まりになった。そのことで一度話し

たいんだ。

涼子 : 私, ニューヨークへは行きませんし, それにもうあなたの妻でもございません。

敬一郎: **だから**, その事を含めて, 一度じっくり会って.....もしもし.....聞いているのか? (例のみ蓮沼 (1992) より)

この場合, (21)の「だから」で始まる, 敬一郎の発話は, (22a)のように「だから」に先行する理由節を補って言い替えることが可能である。また, (22b)のように「だから」に後続する主節が言葉にならない場合も想定される。

(22) a. 君にもいろいろ言い分もあるだろう。私にも聞いてもらいたいことがある。**だから**, その事を含めて, 一度じっくり会って話し合おう。

b<sup>16)</sup>. **だから**～。

従って, 「だから」も「だって」の場合と同様, 連続する発話を結ぶ接続詞が, 接続するはずの一方の項を失い, 最終的に, 両方の項も失って感嘆詞になる文法化のプロセスをとることがわかる。

以下, 「だから」を文法化の主要な集束点であるステージごとに動態語用論の枠組みで記述していこう。

### 3.2.1 ステージ1

ステージ1は(22a)のように「だから」が2つの連続する発話を連結する接続詞として用いられている場合である。この場合, (22a)のうち「だから」に先行する発話は, 先行発話者淳子の「拒否」の発話行為に対する「思いとどませ」の発語内行為である。しかも, 淳子の発話は, それに先行する敬一郎の「申し出」に対するものである。そこで, 発話者敬一郎と発話者涼子をそれぞれ, A, Bで表し, 敬一郎の「申し出」の命題を  $P$  と置くと, まず, 淳子の「拒否」の

発話行為は(23a)の様に表示される。さらに、「拒否」の発話内効力は命題否定ではなく発話内否認であるから、(23a)は(23b)のように書き換えられる。<sup>17)</sup>

- (23) a.  $F_{\text{reject}}^A (F_{\text{propose}}^B (P))$ .  
 b.  $F_{\sim\text{accept}}^A (F_{\text{propose}}^B (P))$ .

従って、ここでの動的対話連鎖は、涼子の「拒否」に対する敬一郎の「思いとどまらせ」の発話内効力  $F_{\text{discourage}}^B$  がその項に先行発話をとるという形で表示できるから、(24)の対話表示に部分写像することができる。

- (24)  $F_{\text{discourage}}^B (F_{\sim\text{accept}}^A (F_{\text{propose}}^B (P)))$ .

また、(22a)のうち「だから」に導かれる発話は、「だから」の因果関係の機能により、それに先行する発話を理由として引き受けるから、「涼子も敬一郎もお互いに言いたいことが言える」ということが成り立つ場合は常に成り立つ。故に、後者を  $Q$  で表すと、両者の間には(25)のような限定含意の関係が成り立つ。

- (25)  $P \models Q$

従って、「だから」に後続する発話は、そのような論理関係が成り立つことを主張しており、(26a)のように表すことができる。(22a)は(26b)のような対話表示に部分写像される。

- (26) a.  $F_{\text{assert}}^B (P \models Q)$   
 b.  $F_{\text{discourage}}^B (F_{\sim\text{accept}}^A (F_{\text{propose}}^B (P))) \wedge F_{\text{assert}}^B (P \models Q)$

### 3.2.2 ステージ2

この場合はステージ1と違って、「だから」に先行する発話は明示的な形で存在しない。従って、「だって」の場合と同様、円滑な対話連鎖を保証するためには、本来在るべき先行発話を持つと想定される「思いとどませ」の発語内効力を、「だって」で始まる発話が肩代わりしなければならない。この場合、「だから」に先行する発話の持つ「思いとどませ」の発語内効力が、「だから」に引き継がれたと想定される。

従って、ステージ1の場合と比較すると、その発話連鎖は、(26b)と違って、ステージ2の対話表示は(27)のように部分写像される。

$$(27) \quad F_{\text{discourage}}^B(\phi) \wedge F_{\text{assert}}^B(P \models \phi)$$

この場合、(27)は(26b)と違って、まず、「だから」の先行発話の命題は空であるから、その発話が明示的であった場合に在ると想定され、かつ、対話連鎖の保存の原則から見て必要と仮定される「思いとどませ」の発語内効力のみが存在する。さらに、(27)の場合、(26b)と違って、「だから」に導かれる発語内効力については、その項となる限定含意関係が空の帰結節をとるため、「補足説明」の成功条件を満足しない。従って、欠陥のある発話行為に陥っている。そして、このような変化は、「だって」のステージ2と同様、「だって」が、本義の「補足説明」の読みを弱め、「思いとどませ」の読みを持つに至ったことを説明している。

### 3.2.3 ステージ3

このステージは前者2つのステージと違って、「だから」に先行する発話は明示的な形で存在しない。従って、「だって」の場合と同様、円滑な対話連鎖を保証するためには、本来在るべき先行発話を持つと想定される「思いとどませ」の発語内効力を、「だって」で始まる発話が肩代わりしなければならない。この

場合、「だから」に先行する発話の持つ「思いとどませ」の発語内効力が、「だから」に引き継がれたと想定される。また、「だから」に導かれる発話は、空であるから「説明」の成功条件をまったく満足しない。従って、この発話は、言明の発語内効力しかもたない。よって、ステージ3の「だから」は、「思いとどませ」と「言明」の2つの発語内効力の連言として(28)のように対話表示される。

$$(28) [F_{\text{discourage}}^B \wedge F_{\text{assert}}^B](\phi)$$

### 3.3. 一般的仮説を求めて

前の2つの項では、対話結合子「だって」と「だから」の対話配列上の3つでしかも3つに限られる場合は、共に、結合子の接続詞から感嘆詞への文法化に対応することを観察し、さらに、そのような文法化の変遷を背景に持つ動的対話連鎖は、動的語用論の対話表示に静的に部分写像できることを示した。その際、これらの対話結合子が、その前に、先行発話者の発話を受ける発話を明示的な形を取らない場合、その先行発話者との間の対話の円滑性を保証するために、本来在るべき先行発話の代行役を勤めているという姿が浮き彫りにされた。このことは、2節で提示した(6)の仮説が、文法化のステージ1からステージ2への変遷に対応することを明らかにした。そして、このことにより、先行研究に残された3つの疑問に対して、この仮説に基づき与えらると想定した(7)の解答が正しいことが証明された。

これまでの分析を通して、次の2つの一般的特性が見つけたされたように思われる。一つは、「円滑な対話連鎖を保証するためには、本来在るべき先行発話を持つと想定される発語内効力を、結合子で始まる発話が肩代わりする」に見られる、「対話連鎖保存の法則」とでも呼ぶべき特性である。今一つは、その特性の背後にある、言語形式にかかわるものであり、「基本形式保存の法則」とでも呼んでおきたい特性である。具体的には、ステージ1からステージ2への変



化において、「だって」はその本義を保証する「AだってBだから」という形式を失う。しかし、言語使用者は無意識にその形式を守ろうと、「だって」と被結合子Aとの関係を保とうとしているように思われる。

どうも、言語使用者は、ぎりぎりのところまで保守的で、既存の言語形式を温存し、それまでの連続する対話連鎖の流れを保全しようとし、精いっぱいところで新しい形式や新しい対話の流れに切り替えているように思われるのである。これらは全て対話における「自己保全の原理」に基づくものであろうと考えるが、それについては稿を改めたい。

#### 4. 結語に代えて

本稿でははじめに、対話は螺旋鎖ダイナミズムを持つ存在であるとのべた。このことを角度を変えてまとめておこう。人間は、対話において、よほど制度化され、個人の意志や意識のゆれ・ゆらぎなどが入り込む余地の制限された特別な場合を除いて、多くの場合、自己の利害に沿う情報を、自己の把握力に応じて、都合のいいように取捨選択し・活用している。そして、その範囲において他者から合理的と思われるように振る舞っているのである。故に、人間の対話には「辻褃合わせの見せかけの合理性」の部分も多く含まれている。しかも、その辻褃合わせも、必ずしも意識的なものとは限らない。従って、Searleも再三指摘しているように、発話行為理論を会話分析にそのまま適用することには問題がある<sup>18)</sup> その適用は、せいぜい会話の部分集合に限られていなければならない。本稿で提案した動態語用論は、そのような会話の部分集合を対象にした理論である。従って、これまでに提案した規則もそのような、対話の部分集合にのみ働くものであり、Shegloff (1990) 等の会話分析と違って、すぐさま会話全体への適用を目指したものではない。そもそも、Vanderveken (1990) の発展系としての動態語用論における人間の理性に対する捉え方は、Cherniak (1986) に沿ったもので、「人間は極めて限られた範囲で理性的な存在であり、その論理

的合理性は極小であり、日常の言語使用においては非合理的で不完全な推論をもあえて行う存在である」という捉え方である。言い換えれば、関連性理論と違って、日常の対話における人間を高度に合理的な情報処理有機体などと過大な評価はしていない<sup>19)</sup> この点からも、対話表示があくまで部分写像であり、会話分析のように全体写像を暗に目指したものでないことがおわかりになるであろう。

本稿では、文法化の視点を対話分析に導入した。そこでは、従来の研究に見られるような、個々の対話の個別事例的な分析とは違って、個別事例を文法化という言語事象の歴史的変遷の尺度の上の可能な一つの段階にある姿であると、派生過程の全体的な記述の中に相対的に位置づけている。このことは、発話のタイプの理論である発話行為理論に、次元の異なる新たなタイプを付け加えることを可能にしてくれる。換言すれば、トークンとしての個々の対話事例の間に対話配列の変化という網の目を被せ、そこに対話のタイプを求めたのである。実際、これまで見てきたように、トークンとしての対話の数は無限であるが、結合子に関連する対話の配列上のタイプは3通りであり、3通りに限られる。しかも、このタイプは、文法化のプロセスの3つのタイプに対応しているのである。従って、仮にこれまで述べてきた、これら3つの対話のタイプに対する統一的な記述が正しいとするならば、対話結合子の機能ならびにそれらを包摂する対話の分析は、その極限に限られた論理的合理性の範囲内で完全であると考えて良いと思われる<sup>20)</sup>

最後に、動態語用論は、(i)静的な再帰構造部分に写像する記述・説明の対象として動的な対話展開を捉えることができるという点と、(ii)言語事象の歴史的变化の観点を発話行為理論に導入したという点においてのみ動態なのであって、理論モデルとしては表示理論である限りにおいて、その他の点においては未だ静態である。総じて、今のところ、まさに自己調整しながら動き変化しゆらぐ、対話参与者間の応酬のダイナミズムとしての対話を十全に分析できるものには至っていない<sup>21)</sup> 「対話連鎖保存の法則」や「基本形式保存の法則」、

さらには「自己保全の原理」の妥当性は証明できるか、総じて、対話というゆらぎの系をどう料理するか、動態語用論も他の理論同様、ほんの入り口にたどり着いたところにすぎないのである。

注

- 1) Blakemore (1992: 31) は関連性理論の枠組みで、聞き手の立場からの解釈行為の終了については次の様に述べている：‘Although processing could in principle go on forever, it has to stop somewhere. But where? Intuitively, the answer is clear: where the processor thinks it is no longer worth the effort’. しかし、Ziv (1988: 542) には、ある行為に関連することと、関連しないことを効率的に見分ける仕組みがないと、AI というフレーム問題に陥るという指摘がある。
- 2) これは関連性理論が一貫して取り続けている立場である。cf. Sperber and Wilson (1995)。
- 3) 解釈以外に表示 (representation) の理論的重要性をとなえる別の枠組みには談話表示理論がある。Kamp and Reyle (1993), Geis (1995) を参照されたい。また、対話の動的特質の全てを写象することはできないから部分写象 (partial mapping) ということになる。
- 4) 発話行為理論では、 $F(P)$  の形式をとる基本的発語内行為は、自然言語においては、一つの発語内効力  $f$  と、一つの節  $A$  とから構成され、 $f(A)$  の形式をとる基本文によって表現されると想定されている (cf. Vanderveken, 1990: 14)。
- 5) Appendix を参照されたい。
- 6) 吸収が適用される条件は次のように定められる：吸収されても真理値や充足値に変化がない場合。典型的な場合は、「言葉から世界への合致の方向を持つ」言明の発語内目的を持つ発語内効力の項に出現する場合で、「世界から言葉への合致の方向を持つ場合」、「二重の合致の方向を持つ場合」は、発話の時点以降の命題に示されている行為の実現が対象になるから、行為については吸収できない。従って、発語内効力の吸収規則 (Illocutionary absorption) は次のように定式化できる：

$$a. F_n^A(F_n^B(P)) \Rightarrow F_n^A(P)$$

$$b. F_n^A(\sim F_n^B(P)) \Rightarrow F_n^A(\sim P)^{14}$$

(ただし、 $n$  は言明の発語内目的を持つ発語内行為)

尚、(b) の解釈に際しては、 $\text{assert}(\sim P) \equiv \sim \text{assert}(P)$  であることに留意されたい。すべての言明の発語内目的を持つ発語内行為は  $\text{assert}$  をその意味の核として持っており、発話行為理論では  $\text{assert}$  に複数個の成功条件の積を組み合わせることによって派生されると考えられている (cf. Vanderveken (1990), Chap. 6)。

- 7) 詳細については、久保(1998)とKubo (1999)を参照されたい。
- 8) Maynard (1993)の融合、そして、蓮沼(1997)の折衷的意味に対する批判的議論については、Kubo (1999)を参照されたい。
- 9) 次に示す下線部のような含みが読みとれるから、(4)は自然な対話である：
- B<sub>1</sub> よしなさいよ。だって、ずっととってないんでしょ。いまさら、とってま始まらないわよ。
- A<sub>2</sub> うん。
- B<sub>2</sub> それならよしたら。
- 10) この点については、沖(1996)も参照されたい。
- 11) 沖(1996:101)を参照。
- 12) むろん、「私信じるわよ」のような具体的発話が復元できると主張しているのではない、そうではなく「だって」に継承されている「反対」の発語内効力をもち、文脈に依存した何がしかの発話が復元可能だと述べているのである。
- 13) この場合、aに示すように、「反対する」という動詞が命名する発語内行為は「ある命題を、それと両立しない別の命題が議論の脈絡ですでに登場したという付加的予備条件で言明すること」(cf. Vanderveken, 1990: chapt. 6)であるから、単純に言明の発語内効力の命題否定である「～でないことを言明する」には置き換えられない。従って、(11b)はbのように書き換えることができない。
- a.  $F_{\text{assert}}^B(\sim F_{\text{assert}}^A(P)) \neq F_{\text{object}}^B(F_{\text{assert}}^A(P))$ .
- b.  $F_{\text{assert}}^B(\sim F_{\text{assert}}^A(\sim \exists x [\text{信じる}(x, P)]))$ .
- 14) 「説明」の発語内行為は、その成功条件の一つである命題内容条件に、「命題内容は命題間またはその発話間の論理関係の成否についての言明でなければならない」がある。この例は、限定含意という論理関係が成立していないから、この条件を満足していない。また、発話行為理論では成功条件を満足しない発語内行為を、欠陥のある発語内行為と呼ぶ(cf. Vanderveken, 1990)。
- 15) この例のように限定含意という論理関係を項にとらない場合は、「説明」の発語内行為は、その成功条件は全く満足されないから、「言明」の発語内行為に等しい。
- 16) 次のような、苛立ちの「だから」を含む(21'e)に対応する事例がある：
- 新婦： もおっ！ いいかげんにしてよ！ 一曲決めるのに何時間かかるの!?
- 新郎： だって、僕たちの大事な披露宴だよ。
- 新婦： 仕事に戻らないと休憩終わっちゃう！
- 新郎： まだ花束贈呈とか決めなきゃいけない曲がたくさんあるのに。
- 新婦： **だから** 時間が…あー、もう、主任にイヤミ言われちゃう。(星里, 1994)
- 17) ここで言う、命題否定の代表は、「禁止」で、命題Pを禁止するということは、命題 $\sim P$ を命令することと同等である。「拒否」は、発語内否認で、命題Pを拒否するということは、

命題  $P$  を受け入れないことと同等であり、命題  $\sim P$  を受け入れることとは同等ではない。

18) Searle et al. (1990), Vanderveken (1994) を参照されたい。

19) Gorayska and Lindsay (1993:314) は次のように論じている：

‘For Sperber and Wilson, humans are presumed to be highly rational information processing organism that aim “at improving the quantity, quality and organization of their knowledge.”’

20) ここでいう範囲とは、Vanderveken (1990, 1994) で提案されている一般意味論・一般語用論の論理的基盤であるブール代数ないしはアーベル関数的に定義できる範囲のことである。

21) Fogel (1993), 須田(1999)を参照されたい。

#### 記号一覧

$P$	命題の変項
$F$	発語内効力の変項
$F(P)$	発語内効力 $F$ と命題 $P$ からなる基本的発語内行為を命名する。
$F_x^x$	発話者 $X$ による発語内効力の変項
$A \models B$	$A$ が $B$ を限定含意する： $A$ が成り立つときは、かならず $B$ も成り立つ。

#### 参考文献

- Austin, J. 1962. *How to do Things with Words*, London: Oxford University Press.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell.
- Carston, R. 1993. Conjunction, explanation and relevance, in *Lingua* 90, 27-49.
- Cherniak, C. 1986. *Minimal Rationality*, M. I. T. Press.
- Evans, D. A. 1982. *Situations and Speech Acts: Toward a Formal Semantics of Discourse*, Ph. D. dissertation, Stanford University.
- Fogel, A. 1993. *Developing Through Relationships*, The University of Chicago Press.
- Ford, C. E. and Mori, J. 1994. Causal markers in Japanese and English conversations: a Cross-linguistic study of interactional grammar, *Pragmatics* 4-1, 31-61.
- Geis, Michael (1995) *Speech Acts and Conversational Interaction*, Cambridge.
- Gorayska, B. and R. Lindsay 1993. The Root of Relevance, in *Journal of Pragmatics* 19: 301-323.
- 蓮沼昭子 1991 「対話における『だから』の機能」, 『獨協大学外国語学部紀要』, 第4号,

- 137-153。
- 蓮沼昭子 1995 「談話接続語『だって』について」, 『獨協大学外国語学部紀要』, 第5号, 265-281。
- Hopper, P. J. and E. C. Traugotte 1993. *Grammaticalization*, Cambridge.
- Iten, Corinne 1998. *Because and although: A Case of Duality?*, in Rouchota and Jucker (eds.) *Relevance Theory Applications and Implications*, John Benjamins.
- Ivasko, L and Eniko N. T. 1998. *Types and Reasons of Communicative Failures: A Relevance Theoretical Approach*, a talk at the 6th IPrA Conference, Reims, France.
- Kamp, H. and U. Reyle 1993. *From Discourse to Logic: Introduction to Modeltheoretic Semantics of Natural Language, Formal Logic and Discourse Representation Theory*, Dordrecht: the Netherlands.
- 久保 進 1998 “*Datte and Demo reconsidered—a dialogical analysis of Japanese connectives*,” 『高原脩教授還暦記念論文集』, 高原脩教授還暦記念論文集刊行会。
- Kubo, Susumu 1999. On an Illocutionary Connective *datte*, in K. Turner (ed.) *The Semantics/ Pragmatics Interface from Different Points of View*, CRISPI vol. 1, Elsevier Science.
- Maynard, S. K. 1993. *Discourse Modality—Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language*, John Benjamins.
- 沖 裕子 1996 「対話型接続詞における省略の機構と逆接」, 『論集 言葉と教育』, 97-111, 和泉書院。
- Rouchota, V. and A. H. Jucker (eds.) 1998. *Current Issues in Relevance Theory*, John Benjamins.
- Schegloff, E. 1990. To Searle on Conversation: A Note in Return, in Searle *et al.* (*On*) *Searle on Conversation*, John Benjamins.
- Searle, John 1979. *Expression and Meaning*, Cambridge University Press.
- Searle, J. and Vanderveken, D. (1985) *Foundations of Illocutionary Logic*, Cambridge University Press.
- Searle, J. *et al.* (eds.) 1990. (*on*) *Searle on Conversation*, John Benjamins.
- Sperber, D and D. Wilson 1995. *Relevance*, Blackwell.
- 須田 治 1999 『情緒がつむぐ発達』, 新曜社。
- Takahara, P. O. 1998. Pragmatic Functions of Discourse Markers in English and Japanese, Plenary Talk at the 6th IPrA Conference, Reims, France.
- Vanderveken, Daniel 1990. *Meaning and Speech Acts*, vols. 1, Cambridge University Press. (『意味と発話行為』, 久保進 監訳, 西山文夫, 渡辺扶美枝, 渡辺良彦 訳, ひつじ書房, 1997年)

Vanderveken, Daniel 1994. *Principles of Speech Act Theory*, Univ. of Quebec at Montreal. (『発話行為の原理』, 久保進 訳, 松柏社, 1995年)

Ziv Yael 1988. On the Rationality of 'Relevance' and the Relevance of 'Rationality', in *Journal of Pragmatics* 12, North-Holland.

#### 引用作品一覧

秋月りす 『OL 進化論』, 1990。(Akizuki, Risu, *The OL Comes of Age* (translated by Y. Tamaki; annotated by J. Yoshida), Kodansha/ Kodansha International, 1994)

岡崎二郎 『アフター0』, 小学館, 1990。

星里もちる 『結婚しようよ』, 小学館, 1994。

#### Appendix : 発話行為の再帰的定義

1.  $F_X^A(X)$  は話し手 A による発話行為である。その場合,  $F_X^A$  は命題あるいは話者の異同を問わず別の発話行為 X を項として取る発語内効力である。
2.  $F_X^A(\sim X)$  も発話行為であり,  $F_X^A(X)$  の命題否定の発話行為である。
3.  $\sim F_X^A(\sim X)$  も発話行為であり,  $F_X^A(X)$  の発語内否定の発話行為である。
4.  $F_X^A(P)$  と  $F_Y^A(Q)$  が同じ話し手 A による別個の発話行為であるならば,  $F_X^A(P) \wedge F_Y^A(Q)$ ,  $F_X^A(P) \vee F_Y^A(Q)$ ,  $F_X^A(P) \Rightarrow F_Y^A(Q)$ ,  $F_X^A(P) \models F_Y^A(Q)$  もまた発話行為である。
5. これ以外は発話行為ではない。

ただし, 命題と発語内効力の再帰的定義は Vanderveken (1990) に従う。

(連絡先: e-mail: kubo@cc.matsuyama-u.ac.jp FAX: 089-977-5270)